



棚田 (安平)

うたごよみ 文月

〔短歌〕

米納三雄選

成るように成れと心を放つとき沈みゆく陽の一瞬冴える
本田富美子
コンクリート割きて生えたるベチユニアの花の持ちいる無限の力
松本ぬい子
草も木も新緑となり輝けり季節は古いの心励ます
森田 房恵
よく食べてよく笑いたる同窓会あとは何時もの静かな暮らし
内田乃武子
子燕の賑わう納屋に鴉の眼守るや孫はのれん下げおり
井上ユリ子
春雨に庭木の下に咲く紫蘭宿借る乙女の肩窄め立つ
上村 かず
猛威振う口蹄疫に困惑する農家の叫び国を揺るがす
吉永由紀子
基地移転・口蹄疫とふ難題の一面の記事雲影ばかり
本田 隆章
政局の仕分け作業の内容をテレビに見つつ驚くばかり
上村やす美
これという花もなき庭に大輪の白薔薇立てり空突くごとく
内山タミエ
ああ悲し共に過ごせし牛や豚口蹄疫に引き離されぬ
緒方 明美
二廻りほどに繁りし楠の香りを放つ新緑仰ぐ
赤星 延子
旅に会いし大仏様も雨に濡れ微笑むごとく吾を迎えます
田添 徳子
母の日に行けず御免とメール来る心を使う娘よ愛し
塚原 暁益
断りの理由にまたも親族の法事使えり仏に詫びて
渡辺 幸士

〔川柳〕

〔口〕

口約束ほろり信じた甘い夢
北 仁子
無言でも心豊かなお人柄
坂口 政子
口ほどに我が手進まぬ歳になり
道上キヌ子
口故にとなり近所が遠くなり
福田 清子

〔若者〕、〔若葉〕

夏みこし若さ弾ける豆絞り
緒方 正堂
悠久の大義に散った友偲ぶ
林 雅之
若者に席譲られて老い寂し
古閑チヨミ
鯉のぼり青葉・若葉の海泳ぐ
成松 松枝

〔梅雨〕

旅立ちに晴れぬ梅雨空気を採ます
内村 邦夫
紫陽花の花はひらいて梅雨を待つ
布田 愛子
梅雨の朝孫の登校傘の花
緒方 瑞枝
ペランダに彩り並ぶ梅雨晴れ間
渡辺 幸士

〔俳句〕

麦秋やわたしの好きな路線バス
高田れい子
囀りを四方にはかどる草を引く
田端 慶子
合掌の揃えし正座のひざの冷え
堀田 孝恵
耐えて来し越し方思う夕端居
本田 信子
夜の散歩螢を連れて帰り道
本田サツ子
大井手の水滔滔と田植前
古田 幸子
風韻にかなう若葉やしつとりと
楠本 美鶴

お問い合わせ先 町教育委員会公民館事務局
096-234-1111 (内線321)

ひとの動き (敬称略)

5月11日(火)～6月10日(木)

birth お誕生おめでとう

住所	氏名	性別	保護者
仁田子	佐藤 愛理	女	浩之
津志田	児玉 陽子	女	賢幸
仁田子	狩野 菜子	女	真矢
仁田子	井上 敬太	男	一精
田口	山口 彩	女	祐治
中横田	谷崎 然斗	男	介朗
芝原	今村 凜斗	男	祐康
緑町	平田 紗佳	女	貴利
早川	岡部 彩未	女	和宏
有安	大塚 萌	女	祐大
下横田	吉村 井本	男	

marriage ご結婚おめでとう

住所	氏名
東寒野	北岡 孝聖
美里町	桑崎 祐美
熊本市	今村 大樹
中横田	谷頭 幸子

condolence お悔やみ申し上げます

住所	氏名	年齢	世帯主
横田	田上トシエ	85	トシエ
緑町	赤星トシエ	95	トシエ
津志田	森口 眞澄	59	みどり
田口	坂本ミツル	96	ミツル
仁田子	緒方 雪男	83	愛子
岩下	甲斐 スギ	89	誓也
芝原	宮本眞由美	58	青史
船津	岩永 百喜	88	百喜
府領	中野 健一	73	信子

Data 甲佐町の人口・世帯数

項目	数	増減
男	5,372	6
女	6,144	14
計	11,516	20
世帯数	4,170	2

平成22年5月31日現在

〔町史編さんだより〕

春が秋の彼岸に、集落の代表者が阿蘇神社へ参拝してお札を貰い受ける阿蘇参りという行事が行われています。代表者は2〜4人で、くじで選ばれるのでくじ参りともいわれています。代表者がお札を貰い受けて帰ると、集落でねぎらいのサカムカエの宴を設けます。平成21年は、県下74集落が阿蘇参りをしています。甲佐町は浅井・糸田・船津の3地区で、船津地区は防分と古閑の2集落が参拝しています。早川地区は、平成16年に5集落がお札を受けています。小鹿・上揚・下豊内・横田・下横田地区は、明治・大正時代に記録が残っています。下横田地区は大正13年に参拝の規則を定め、参拝は昭和48年まで続きました。小鹿地区は、会議で昭和22

甲佐とも歴史的な縁のある阿蘇神社 (阿蘇市)



甲佐の歴史を紡いで

～町史編さんだより(22)～

阿蘇参りと甲佐

町史編集委員 佐藤 征子 (民俗)

年に廃止を決めています。阿蘇参りの時、先ず噴火口を拝み、阿蘇山上神社を参拝し、下つて宮地の阿蘇神社へという行程をとる集落があります。江戸時代に書かれた『肥後国誌』に、春秋の彼岸に御池(噴火口)の拝所を目指す参詣者が多数あり、

彼岸の翌日には御池より水が湧き上がって溢れて「参詣登山ノ不浄」を洗い流すという伝えがあると記述されています。噴火口は平安時代には神霊池と呼ばれ、阿蘇の神様・健甞龍命の神宮とみなされていました。その後、山岳仏教が盛んになって阿蘇山上を修行

の場に、鎌倉時代には僧侶の住い・住坊が設けられて坊中が組織され、南北朝時代には住坊が参拝者の宿所になりました。山上の坊中は豊臣秀吉の九州下向により衰退しましたが、加藤清正が阿蘇の麓・黒川村に復興を命じ、麓坊中ができました。江戸時代、山上には本堂をはじめ20余りの堂社が祀られ、甲佐明神も含まれていました。明治時代、神仏分離令により、本堂は麓の黒川に下ろされて、本堂跡に阿蘇山上神社が建てられました。

阿蘇山に対する信仰と阿蘇参りの関係は長い歴史があると考えられます。▼『甲佐町史』編さんに関するお問い合わせ先
町社会教育課町史編纂係
☎096・234・3310

豊内の免の山を望みながら、「今は、地元の理解があつて調査が進められます」と話すのは、町文化財保護委員の清村さん。巻頭でご紹介しました「陣ノ内館跡」発掘調査。地元・下豊内区にお住まいの清村さんは、地元をはじめとして広く町民の皆さんに対して、調査への理解の呼び掛けと文化財保護に関する啓発に尽力されています。清村さんは免の山について、史跡としての魅力はもろろんのこと、「ほどよい高さで傾斜で健康のためのウォーキングにも適していて、上からの眺望も素晴らしい」と、一般の皆さんも楽しめる場所であると紹介。これからの免の山が持つ可能性について、「史跡を中心とした公園のような空間ができればみんなが楽しく集える憩いの場所になれるのでは」と期待を寄せています。

編集後記